

## 日本図の変遷 ～赤水から伊能へ～

小野寺淳 平井松午

… 4

の姿や形状を大きく変えてみせたのが、長久保赤水作「改正日本輿地路程全図」であった。一七八〇（安永九）年春に大坂で刊行されると、その正確さで評判となる。

後世、赤水が作製し刊行した日本図を「赤水図」という。この赤水図、もちろん一朝一夕で完成したのではない。五十二歳になるまで、赤水は年下であろうが、訪ねてきた人には話を聞き、何が正しいか考証に考証を重ねた。この考証の跡を示す地図「改製日本分里図」が子孫宅に残されている。

十七世紀後半には西欧の天文学が漢字に翻訳され、清国から輸入されていたので、知識人の多くにはすでに、世界は球体であることや、経緯線の存在は知られていたし、経緯線を平板の紙に表現する図法も知られていた。球体であることを知りながら、方眼の経緯線を引き、経緯線の上に日本列島を描く努力を重ねた。

京で会った儒学者柴野栗山に序を賜り、「改正日本輿地路程全図」が大坂で刊行された。

地球が球体であることを意識させる「輿地」であり、緯線と直交する経線の上に描かれた日本列島と、名称が記された山々や河川、主要な街道と町や村を記した「路程」の地図だった。刊行図として初めて緯度を記載した緯線、京都御所を基点とした経線が引かれた。十里を一寸とする約百二十九万六千分の一の小縮尺図で、主要な地名と道が記載される。持ち運ぶには大き過ぎる大判であった。

値段も普通の彩色で販売された初版の安永版赤水図は、当時の米価を基準に一両を五万円とすると、かなり高価な地図であったよつた。

（おのでら・あつし 放送大

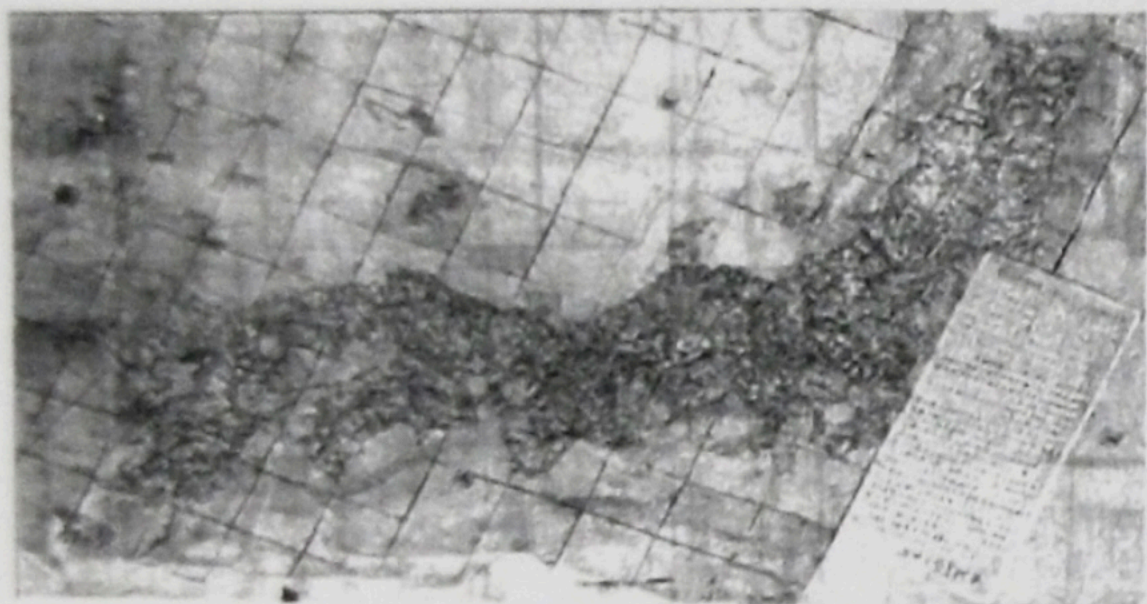
茨城学習センター所長）

## 実学から生まれた赤水の地図作り

すでに齢八十五歳であった長久保赤水は、門人立原翠軒の勧めで、水戸藩江戸上屋敷の小石川藩邸から故郷常陸国赤浜村（現茨城県高萩市赤浜）に戻り、まもなく一八〇一（享和元）年七月二十三日に死去した。その十日後、伊能忠敬が東日本の海岸線を北に向かって独自に測量する途中、赤浜村の砂丘列にある赤水の墓に墓参した。

ともに天文学を基礎としつつ、風土記など文献や地図を精緻に考証した赤水図から、測量による正確な日本沿岸の伊能図への転換が交差した、まさにその瞬間であった。

古代・中世における日本列島



改製日本分里図（高萩市歴史民俗資料館 84・6×134・8センチ）

資料館 84・6×134・8センチ